

## 令和六年三月度 御報恩御講

『阿仏房御書』

文永十二年三月十三日

五十四歳

末法まつぽうに入いって法華經ほけきょうを持つ男女なんによのすがたより外ほかには宝塔ほうとうなきなり。若もし然しかれば貴賤きせん上下じょうげをえらばず、南無妙法蓮華經なむめいほうれんげとなふるものは、我わが身宝塔みほうとうにして、我わが身又多みまたた宝如來ほうにょらいなり。妙法蓮華經めいほうれんげより外ほかに宝塔ほうとうなきなり。法華經ほけきょうの題目宝塔だいもくほうとうなり、宝塔ほうとう又南無妙法蓮華經なむめいほうれんげなり。今阿仏上人いまあぶつしようにんの一身いっしんは地水火風空ちすいかふうくうの五大ごだいなり、此この五大ごだいは題目だいもくの五字ごじなり。然されば阿仏房あぶつぼうさながら宝塔ほうとう、宝塔ほうとうさながら阿仏房あぶつぼう、此これより外ほかの才覚さいかく無益むやくなり。聞もん・信しん・戒かい・定じょう・進しん・捨しゃ・慚ざんの七宝しちほうを以もつてかざりたる宝塔ほうとうなり。

(御書七九二番一三行目〜七九三番二行目)

本抄は、文永十二(一二七三)年三月十三日、日蓮大聖人が五十四歳の御時、身延に於いて認められ阿仏坊日得に与えられた御書であります。

はじめに阿仏房の様々な御供養に対する御礼と、宝塔についての質問に対し、甚深の御法門が述べられた御消息です。御述作の時期は、従来は文永九年三月とされてきました。しかし、阿仏房の入信は文永九年正月の塚原問答の前後の頃とみられ、本抄を、入信後まだ二カ月しか経過していない、同年三月の御書とすると、本抄中の「阿仏房……北国の導師とも申しつべし」との仰せは、あまりに無理があるといわざるをえません。記述内容からみて、本抄は阿仏房がある程度の信心修行期間を経た後に、身延から発せられた御書と考えられます。

また、阿仏房は俗名を遠藤為盛といい、もと順徳上皇の北面の武士で、承久三年(一二二一年)、上皇が佐渡に流された時、共に佐渡に来て定住した人と伝えられています。しかし、現存の阿仏房関係の御消息の中には、順徳上皇に対する記述はなく、むしろ「千日尼御前御返事」(一二五三頁)の「尼が父の十三年は来る八月十一日……」の文、「千日尼御返事」(一四七八頁)の「故阿仏聖霊は日本国北海の島のいびすのみなりしかども……」の文等を見ると、古くから佐渡に住していた人ではないかと思われれます。

ただ入信以前は、熱心な念仏の信者であったことが、「阿仏房」の名前からうかがえます。しかし、大聖人様から念仏の邪義を破折され、長年にわたって強盛に信仰してきた念仏をきつぱりと捨て、正法に帰依しました。この一途な姿から、純信じゆんしんにして剛直こうちやくな人柄であったことが察せられます。

日蓮大聖人佐渡流罪の直後、大聖人の姿に接して入信し、以来、文永十一年大聖人が流罪赦免となって鎌倉に帰られるまでの二年余り、妻の千日尼と共に大聖人に給仕し、大聖人の身延入山後も、高齢の身で数回にわたり供養の品々を携え身延を訪ねています。

阿仏房は弘安二年三月二十一日、に死去しましたが、九十一才で亡くなるまでの間、阿仏房は老齢にもかかわらず、遙かに海山を越えて、身延の大聖人様のもとへ三回も登山参詣をされました。このような信仰の姿は、まことに信者の鑑であり、古来、登山の精神は阿仏房に学べと謳われてきたのも当然といえましよう。本抄においては未だ元気な様子うかがえます。また、本抄では大聖人様が御本尊授与に言及されていますが、それと阿仏房が賜わった建治元年（文永十二年）四月の御本尊との関連が想定されることなどから、本抄は文永十二年三月十三日の御著述と推定されます。

私たちは、阿仏房が、大聖人様をひたすらお慕い申し上げ、純真な信心をもって、身命を賭してはるばる登山した、その精神を我が精神とし、ひたすら戒壇の大御本尊様を渴仰奉り、血脈の御法上人をお慕いする純真な信心に住して登山したいものです。

また、阿仏房の妻や子はもとより、曾孫に至るまでが、皆、大聖人様、日興上人様の弟子となり、法統を相続したことが知られています。阿仏房自身が大聖人様から、「北国の導師」と称えられています。阿仏房の曾孫に当たる如寂房日満も、幼少より富士の日興上人様のもとに参じて行学に励み、北陸七カ国の門下の別当に任じられています。

ところで、本抄拝読の要点は、言うまでもなく『宝塔の御法門』です。宝塔とは、法華経見宝塔品第十一において、大地より涌出して虚空に止まった大宝塔を指します。虚空会の名の由来もここにあるのです。また、この宝塔には、『証前・起後』及び『閉塔・開塔』等のそれぞれ二つの意義があることを示されています。

まず『証前』とは、釈尊が法華経迹門に説かれた『十界互具・二乗作仏』の法門を証明することです。二乗作仏とは爾前経における二乗永不成仏の説とは正反對の教えであることから、宝塔中の多宝如来が、聴聞の衆に対し、「皆是真実」との大音声をもって釈尊の説法が真実であることを証明されたことをいいます。すなわち、宝塔涌現以前の説法を証明されたのでこれを「証前の宝塔」といいます。

次に、釈尊が出世の本懐たる法華経を説かれた目的は二つあります。その一つは、『寿量品の説法』により、仏の久遠における成道と、舍利弗等の在世の衆生との久遠以来の因縁を説き明かして、所化の衆生を得脱せしめることです。他の一つは、『末法のため』に、上行等の地涌の菩薩に要法を付囑されることです。

宝塔の涌現とは、虚空会における、これらの本門の重大な教説を説き起す遠序に当たる意義を有するところから、後を起すとの意味で起後の宝塔と呼ばれるのです。

また、閉塔とは、閉じた宝塔の中から、多宝如来が二乗作仏を証明したことで、その意義は迹門に属し、開塔とは、塔の扉が開かれた後、二仏並座して寿量品が説かれる本門の意義を意味しています。

釈尊結縁の人々はこの寿量品の説法を聞き、その心田に下された久遠元初の仏種を覚知し、即身成仏の本懐を遂げることができたのです。これに対し、今末法においては、大聖人様が御建立あそばされた宝塔たる御本尊こそが、久遠元初の人法一箇の法体、生

命本源の仏種となります。故に、この御本尊を信受するとき、私たち一切衆生の生命に内在する仏性が開かれ、凡夫即極普通の人間の身に、偉大な仏の境涯を開いていけるのです。これを「凡夫即極」とも、「凡夫即仏」ともいいます）の妙法の当体と顕われることを本抄に示されたのです。「南無妙法蓮華經」となるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり」「阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房」等の仰せは、「南無妙法蓮華經」こそが歴劫修行を必要としない、真実の即身成仏の大法であり、この大法を信受するところに、当体蓮華（一切衆生の当体が妙法蓮華であること）を証得する大功徳があることを示されたものといえましよう。あらゆる宗教、あらゆる仏教の中において、ただ日蓮大聖人様御建立の三大秘法にのみ、真実の即身成仏の大益があることを確信すべきです。

ところで又、本抄は、まず天台の釈をもって、証前・起後、次に文底下種仏法の意義の上から、「末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり」と、宝塔とは、男女を問わず、通じて法華經の行者の一身の当体であると示されており。しかし更にその宝塔とは、別して、妙法の大曼荼羅本尊にこそまします意義を「妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」と示され、また、行者の証得に約して「我が身又三身即一の本覚の如来なり」と、凡夫即極の成仏の意義を示され、その肝要が信心にあることを教示されています。

更に宝塔たる大聖人様御所顕の御本尊は、法統相統の子孫でなければ譲つてはならず、信心強盛の者でなければ拝させてはならないと戒められると共に、阿仏房こそ北国の導師と称えられ、宝塔たる御本尊を夫婦固く受持するよう勧められ本抄を了らされています。

ところで、宝塔出現の意味は、所詮、三周の声聞が法華經に来て己心の宝塔を覚知するということであり、今、日蓮の弟子檀那もまた同様である、末法に入つて法華經を持つ男女の姿よりほかには宝塔はないのであり、そうであるならば、貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と唱える者は、そのままわが身が宝塔であり、わが身がまた多宝如来である。妙法蓮華經よりほかに宝塔はないのである。法華經の題目は宝塔であり、宝塔はまた南無妙法蓮華經であると、仰せなのであります。

また、多宝の塔が表しているものは、「仏性」すなわち仏界の生命であり、「宝塔」、つまり七宝をもって飾られているということは、この「仏性・仏界」の生命の莊嚴さ、尊さ、素晴らしさを、このように表現されたのであります。

妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり。宝塔又南無妙法蓮華經なり。法華經の儀式で多宝の塔という、常識では考えられないようなものが現れた。この宝塔は何を表すのかといえ、結局、妙法蓮華經以外の何ものでもないのだ、とのご断言であります。

妙法蓮華經とは「法華經の題目」であるが、この「題目」とは、単なる經の題名ではない。經の題名と言った場合、本体は經そのもの——いま法華經でいえば、二十八品からなる全体——にあつて、經題は、あくまでそれにつけられた名前であると考えがちで

ありますが。しかし乍ら、日蓮大聖人が「法華經の題目」という名称を用いて呼ばれるとき、この関係は逆転していることを知らなければならぬ。言い換えると「妙法蓮華經」という題目が本体であって、二十八品からなる本文は、その説明であるということであります。

この点については、曾谷入道殿御返事（一一八六頁）に「一經の内の肝心は題目におさまれり」また「其の經の中の法門は其の經の題目の中にあり」と言われ、次のように述べられています。

「所詮妙法蓮華經の五字をば当時の人人は名と計りと思へり。さては候はず、体なり。体とは心にて候。章安云はく『蓋し序王は經の玄意を叙し、玄意は文の心を述ぶ』云云。此の釈の心は妙法蓮華經と申すは文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈せられて候。されば題目をはなれて法華經の心を尋ぬる者は、猿をはなれて肝をたづねしはかなき亀なり。山林をすて、菓を大海の辺にもとめし猿猴なり。はかなしはかなし」（一一八八頁）と。その他類文を挙げれば際限が有りませんが、ともあれ、妙法蓮華經という法華經の題目こそ法華經の本体であり、これを日蓮大聖人は三大秘法の仏法として更に明確にあらわされたのであります。「宝塔又南無妙法蓮華經なり」とは三大秘法の御本尊が宝塔の体であるとの意味であります。

今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり。此の五大は題目の五字なり。然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此れより外の才覚無益なりと仰せなのです。

宝塔が一方で「末法に入つて、法華經を持つ男女のすがた」であるといい、一方で「法華經の題目・妙法蓮華經」であると言われるのは、一見、矛盾した仰せのようではありますが、しかし乍ら、ここに明かされるように「法華經を持つ男女」が、その生命の体は「題目の五字」であるから、宝塔は同時に「法華經を持つ男女のすがた」でもあり「法華經の題目」でもあるのであります。

御義口伝「唯以一大事因縁の事」（一七二八頁）にいわく、「我等が頭は妙なり、喉は法なり、胸は蓮なり、胎は華なり、足は経なり。此の五尺の身、妙法蓮華經の五字なり」と。三世諸仏総勸文教相廢立（二四一八頁）にいわく、「五行とは地水火風空なり（中略）是れ則ち妙法蓮華經の五字なり。此の五字を以て人身の体を造るなり。本有常住なり、本覚の如来なり」また「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき」と、あります。

されば、「阿仏上人の一身は……」と仰せのなかに、法華經に説かれている莊嚴無比の宝塔といつても、他の何ものでもない、あなた自身の生命をあらわしているのだよ、とのお気持ちがいかに如実に押せられるのであります。

宇宙万物を構成している地水火風空は、そのまま、我々人間の身体・生命の構成要素でもあり、そして、この地水火風空の五大とは南無妙法蓮華經の題目にほかならず、その法華經の題目が即ち宝塔の表象する当体であるから、五大（地水火風空）からなっている

我々の生命自体が宝塔なので仰せになっているのです。

「然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此れより外の才覚無益なり」と断言されているように、仏法の覚りとは、これ以外にない。すなわち「阿仏房さながら宝塔」とは、わが身が宝塔であり尊極無比の仏性の当体であると覚知することである。このことがわからず、迷うのを凡夫といい、覚知することを成仏というのであるとの仰せであります。また「宝塔さながら阿仏房」とは、経文に説かれていることといっても、所詮は、わが身一人の生命の説明であると知ることであろう。

そして「此れより外の才覚無益なり」とは、仏法とは、このことを覚ることにあるのであって、それ以外のことは、すべて枝葉末節であるとの仰せであります。

次に、聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり。とは

法華経の見宝塔品第十一には、この宝塔の莊嚴華麗な様相を次のように記しています。

「爾の時、仏前に七宝の塔有りて、高さ五百由旬、縦広二百五十由旬にして、地従り涌出して、空中に住して、種種の宝物もて之れを莊校せり。五千の欄楯あつて、龕室千萬なり。無数の幢幡、以て嚴飾と為し、宝の瓔珞を垂れ、宝鈴万億にして、其の上に懸けたり。四面に皆な多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充遍せり、其の諸の幡蓋は、金・銀・瑠璃・磲磔・瑪瑙・真珠・玫瑰の七宝を以て合成し、高く四天王宮に至る」とある。

ここに記述されている七つの宝によって飾られている故に、七宝の塔あるいは宝塔とあるのでありますが、すでに明らかにされてきたように、宝塔といっても、結論すれば「法華経を持つ男女のすがた」の表徴にほかならないと、言われているのであります。

では「法華経を持つ男女」のこの生命を莊嚴する七宝とは何か。その内容を、日蓮大聖人は、聞・信・戒・定・進・捨・慚であると示されたのであります。

これは、すなわち、妙法を持ち実践するうえで我々人間の生命がなす働きであり、仏法実践の内容そのものといえるのです。つまり、妙法を聞き、妙法を信じ、妙法の戒を持ち、妙法を根本に禅定し、精進し、執着等を捨棄し、自らを反省していくことが、わが生命を飾る宝となるとの意味であります。

即ち、この「聞・信・戒・定・進・捨・慚」は、仏道修行にとって不可欠の条件であるとともに、妙法を根本にこの七つを励むことによつて、これら七つの所作の積み重ねが、わが生命を飾る七宝となるのであります。

私達は、本門戒壇の大御本尊を絶対と信じ、御法主人猊下の御指南のまま自行化他の実践、特に破邪顕正の折伏に励むことによつて我が身が七宝で飾られ、真の幸せ、すなわち成仏の境界を築くことができますのです。

唱題・祈念を真剣に重ねていけば、必ず折伏の機会が訪れます。要は諦めないこと、粘り強い折伏こそが広布への道を開く鍵となります。これからの時節、大いに活動の範囲を広げ、精進いたしましょう。

(令和六年三月度御講の砌)

## 日如上人猊下御指南

日如上人猊下は我々は、この謗法に対しては厳しく破折をしていくのです。それは、その人を救うためだからです。今も多くの人が間違った信仰や思想、誤った考え方に執われて、不幸に喘いでいます。その姿を見た時に、私達は、その人達を救うために、その人の持っている考え方、間違った信仰を破折してあげなければなりません。これが折伏なのであります。 (大日蓮・令和五年十月号)

今月は春のお彼岸が行われます。家族・親族など有縁の方々に寺院参詣を勧める絶好の機会でもあります。相手の方と具体的に参詣する日時などを約束して、共に参詣することで日蓮正宗について知っていただき、折伏に繋げてまいりましょう。